



説教要旨 「神は我々と共におられる」

マタイによる福音書1章18～25節

2018年のクリスマス、私たちは今、インマヌエル、「神は我々と共におられる」という恵みの中を歩んでいます。人は病気になったり、苦しい目に遭いますと、自分は神様に見放されたのではないかと、つい思ってしまうものなのでしょう。しかし、インマヌエルの恵みは、私たちが良いと思う時も、悪いと思う時も、どんなときでも、少しも変わることなく私たちをとらえて離しません。

「神は我々と共におられる。」そのことの一つの「しるし」が、私たちには何処でも、どんな時にも祈ることが残されているという事実です。祈るということは独り言ではありません。神様がそこにおられるから、私たちは祈ることができるのです。インマヌエルの恵み、「神は我々と共におられる。」という恵みの現実の中に生かされているが故に、私たちは祈ることができるのです。私たちはこの教会に集うことが出来ない時でも、自分の家で、あるいは病室で、祈ることができるのです。「父なる神様」、そう、私たちがそう呼びかけたのなら、そこはすでに神殿であり、神の家であり、教会なのです。「神は我々と共におられる。」からです。実に、インマヌエルの恵みの中に生きる者とは、祈る者である、祈りの恵みの中に生きる者であるということなのです。

今年もクリスマスを迎えることが出来ました。私たちにとって大きな喜びの日です。しかし、世界では今なお争いは絶えません。闇に覆われているとしか思えないような悲惨な状況があります。しかし、私たちは希望を失いません。インマヌエルの神様の救いの現実は、どんな人間の悲惨によっても消し去られ失われることはないからです。神は我々と共におられる。“我々”です。神様は“私”と共におられるだけではなくて、この“我々”という広がりの中で、この世界のすべてが、この恵みの中に包みこまれているのです。

この“我々”という言葉に、どのような人を、あるいは人々を見出すことが出来るのか。そのことが今、私たちに問われているのです。



(2018・12・23 説教者：稲垣真実)